



小 野 正 和 教 授

詩人小野先生と同人誌のことなど

姜 楨 基

When Lloyd George was Britain's prime minister during World War I, a dinner guest tactlessly remarked upon his shortness. "In Wales, where I come from, we measure a man from his neck up; here, you apparently measure him from his neck down!"

私が小野さんと知り合ったのは大学院生の時だった。先輩同輩がほとんど早稲田出身者のなかで韓国生まれの、他大学出身の私はいわば異邦人であった。学年は違っていたがエリザベス朝の演劇を勉強するという共通項が唯一の接点だった。小野さんは寡黙で温厚な人で私のような異邦人に分け隔てなく接してくれたし、思いやりがあった。それに人の話をよく聞くという、私には決定的に欠けている美德の持ち主である。このような先輩に出会えたことは私の人生にとっては幸運なことであり、小野さんはいつも「大きな」存在と映った。

「ぼくの航海が始まったのは 八十年前父が南の海を渡った時だ」で始まる彼の詩を思い出す。「どこの国にも内と

外があり ぼくの生まれた島がこの国の最初の外で／その外にもまた内と外があり 島の複雑な地層に気づいたのは／島を出て何年もあとのことだった。引揚船の船倉で「冬の海 白い帆布にくるまれた死者が鱻の生け贄に捧げられた朝／（あれはもうひとりのぼくではなかったか）／ぼくの通過儀礼は終わっていた」という小野さんは戦前の台湾で生まれ、国民学校の三年生のとき彼の地で終戦を迎えている。私はそのとき植民地となっていた朝鮮半島の国民学校一年生で、ともに戦中派であった。

われわれ二人の間には初めに酒があった。大学院のときからの長い付き合いであるが、酒を飲まないで話し合った記憶はほとんどない。酒によるこの縁は宿命的なものかもしれない。世間話から演劇や詩の話はそれから始まるものの、性急にがぶ飲みする私からすれば、小野さんの静かな酒の飲み方にはいつも気品が感じられる。そして真夏でも熱燗を好む小野さんには日本酒がよく似合っている。

小野さんは学者であると同時に本質的には詩人である。その始まりはこんなものであったらしい。「ぼくがはじめて加わった同人は『薨』（中略）が印刷からタイプ印刷に時代は変わりそれが一冊出たところで『薨』は消滅（中略）ぼくらの二十歳のエチュードはあそこで終わり」。その小野さんだが同人誌『系』では着実に詩作を習慣化し、書かずにはいられない表現者としての自己を見出したのだと思う。

「久しく詩は 文字の字面を目で追って／声と音とを失った／せめても自分ひとりの部屋でだけ／自分に向かってつぶやくつぶやきとなった」という『系』の同人、河合武氏の遺稿詩は、詩の始原への回帰を希求する叫びのようにも聞こえるが、これは今もつづいている『系』の同人みな的心情の奥底にある思いではないだろうか。

同人誌の話となると、どうしても一九七一年創刊の Groundings のことに触れずに小野さんの青年時代を語ることはできない。発端は椎名町のあるスナックの隅の席で酒を飲んでいたときのことだった。もう多くを語り合ったの

で、小野さんと私はジュークボックスの音楽を聞きながら時の流れを惜しんでいた。まもなく西武線も終電だろう。そのとき二人は示し合わせたかのように同人誌のことを言い出した。会って、飲んで、喋って、別れることの空しさに気づいたのだろう。難しいことはいっさい抜きにして始めよう。互いに恥をさらしあい、触発しあえる新しい友情のために、喋ったことを活字にしようということだった。

扉のページに小野さんはこう書いている「コーナ・シートに身を置く気楽さから、ある日、僕たちは言ったものだ、グランドスタンドでなくたっていいやないか、僕達の視野がせまいとして、そのせまい視野からしか見えない世界もあるやろう。ひとつ成り上がりの神様になったつもりで、僕達の言葉を躍らせようか。」groundingとはエリザベス朝時代の劇場の土間客のことである。徐々に同人がふえ、詩はもちろん随筆や翻訳それに論文まで載るようになって、充実していく同人誌の編集を担当した私は後記を書くのが楽しみであった。

最終号の奥付には一九八一年八月一〇日と記されているので一〇年つづいたことになる。しかし思い出せるこれといった理由もなく終わってしまったのである。「始まった時に終わったとも、終わった時に始まったとも、それは言いうるし、ここにいようと、かしこにいようとそれは自在であっていいはずである」と小野さんは含蓄のある文章を残している。最終号は「難産」だったらしく、小野さんの短い編集後記はベケットの『ゴドーを待ちながら』の登場人物ウラジミルの台詞の引用で終わっている。「墓にまたがり苦しいお産……年を取るには時間がかかる。」ベケットならではの凄まじい台詞である。同人誌が消滅して二十五年がすぎたある日、池袋の飲み屋の「隅の席」で小野さんは極細のペンの小さい字で、私の差し出したメモ帳に丁寧に書いてくれた。Astide of a grave and a difficult birth…We have time to grow old.である。そういえば、今年はベケット誕生から百年目である。

「なぜこの詩がおもしろくてあの詩はつまらないのか、それが分かりさえすればと思ひながら、文学と付き合いつ

づけているのだけれど、それが分からない。」ある訳詩集の書評を小野さんはこのような書き出しで始めている。多くの詩の翻訳にたずさわってきた小野さんが、この一行に込められている虚心坦懐には authentic なものを感じた。これは本物のみに許される表白だろう。それに自らも詩を書く人であればこそ、この呟きには重みがある。さりげなく本当のことをつづる小野さんの書いたものを読むとき、文は人なりという言葉を思い出さずにはいられない。

執筆業績については別表のとおりであるが、本人に確かめてみたところ、早稲田のシェイクスピア研究者たちがおよそ一〇年の歳月をかけて取り組んだ「エリザベス朝喜劇一〇選・第一期」と「同一〇選・第二期」の翻訳の作業に参加したことが記憶に残る仕事であったという。定年を機に詩的エッセイ集『旅する言葉』を書肆山田で出版が予定されている。

小野さんは大学教員になるまでのほぼ一〇年間、中学・高校で教壇にたっていた。中学から高校、大学に至るさまざまな年齢層の学生を数多くそれも四十七年もの長きにわたって指導してきた教員としての小野さんは、きわめて希な存在と言えると思う。教え子にたいしては常に親身になって付き合う温厚な人柄は、ゆえに多彩な卒業生に慕われているのだろう。教員という仕事は小野さんにとっては天職だったと私は思っている。それに早稲田大学では今年で八十年の歴史を刻んだハーモニカ・ソサエティーの会長も務めた。人柄がそのまま現れているいつも整頓されている小野研究室に立ち寄ると、怠惰な私のような人間もその雰囲気にもまれて本を読みたくなるのだから不思議である。その研究室の主がまもなく去っていく。順番とはいえ一抹の寂しさはかくせない。長い間お疲れさまでした。

小野正和教授 略歴および研究業績

履 歴

一九三七年台湾台北市に生れる。四六年引揚、以降東京に在住

学 歴

一九五五年 東京都立竹早高等学校卒業

一九六〇年 早稲田大学第一文学部英文学科卒業

一九六五年 早稲田大学文学研究科英文学専修修士課程修了

一九七〇年 同 博士課程単位取得退学

職 歴

一九六〇―六三年 東京都文京区立第七中学校教諭

一九六三―七〇年 東京都立大泉高等学校教諭

一九七〇―七二年 東京都立商科短期大学・早稲田大学・東京女子大学非常勤講師

一九七二―七八年 東京農業大学専任講師・助教授

一九七八―八三年	早稲田大学法学部助教授
一九八三―現在	早稲田大学法学部教授

主な研究業績

エリザベス朝喜劇の翻訳・校註

(単著)

トマス・デッカー『オールド・フォーチュネイタス』(早稲田大学出版部・一九八八)

トマス・ミドルトン『チープサイドの貞淑な乙女』(早稲田大学出版部・一九八九)

作者不詳『エドモントンの陽気な悪魔』(早稲田大学出版部・一九九五)

リチャード・ブルーム『愉快な仲間』(早稲田大学出版部・一九九七)

リチャード・ブルーム『アンティボデイス』(イギリス・ルネサンス演劇集Ⅰ所収早稲田大学出版部・二〇〇二)

(共著)

ジョージ・チャップマン他『東行きだよお』(早稲田大学出版部・一九八九)

現代詩に関する共著・共訳

(共著)

『シェイマス・ヒーニー』(書肆山田・一九九三)

『現代アイルランドの詩人たち』(敬文堂・一九九六)

(共訳)

エズラ・パウンド『消えた微光』(書肆山田・一九八七)

エズラ・パウンド『仮面』（書肆山田・一九九二）
エズラ・パウンド『大祓』（書肆山田・二〇〇四）

辞典・事典（分担執筆）

『シェイクスピア辞典』（東京堂出版・一七七二）
『坪内逍遙事典』（平凡社・一九八六）
『シェイクスピア大事典』（日本図書センター・二〇〇二）

論文

「コウルリッジと三一致の法則」（日本演劇学会紀要・一九七〇）
「遊戯の演劇」（人文論集・一九七九）
「鏡の演劇」（人文論集・一九八六）
『『冬物語』考』（人文論集・一九九二）
「賭されたる球」（人文論集・一九八〇）
「テンペスト小考」（人文論集・一九八四）
「ジャコビアン魔女劇」（人文論集・一九九二）
「マクニースとイエイツ」（人文論集・一九九七）
「ヒーニー・現実の圧力を押し返す想像力」（英語青年・一九九七）他

その他、研究発表・評論・演劇時評・書評・上演台本翻訳・大学用教科書の編注などは省略させていただきます。